

家族の絆と文学への思い



当館では、小川未明が遺した写真を多数、小川家からお預かりしています。

この写真は、大正2年（1913）頃、小石川区高田老松町（現在の文京区目白台）の借家では撮られたと思われる未明家の家族写真です。

当時、未明は31歳、妻キチは25歳、長女晴代は6歳、長男哲文は5歳、次女鈴江は5月に生まれたばかりでした。

未明は明治39年（1906）5月、長岡出身の山田キチと結婚。作家活動のかたわら、しばらく新聞記者、雑誌記者をしていましたが、明治42年27歳のとき、いっさいの仕事をやめ、文筆で立とうと決意します。

明治43年（1910）12月には最初の童話集『赤い船』が刊行されます。小説集も『愁人』（明治40年6月）、『緑髪』（同12月）、『惑星』（明治42年2月）と発表されましたが、未明の浪漫主義的作風は自然主義隆盛の文壇に迎えられず、生活は困窮。明治43年には晴代と哲文が栄養不良になりました。

この頃のことを描いた小説『鮮血』（『中央公論』大正3年（1914）5月）では、猩紅熱と診断された娘が隔離病院へ入れられ、母が看護についていきます。小説の中の娘は6歳、その弟は4歳、父は病院へ行く娘のために人形を買ってやります。残された弟は、突然い

なくなった母を慕い、父の前でも口をきかなくなります。父は母の愛の力を感じ、息子をたまらなく可哀そうに思うという話です。

小説が世に迎え入れられず、生活が困窮した未明ですが、作家として立とうとする思いは強く、小説を書きつづけ、明治45年（1912）にはネオ＝ロマンチズムの先駆者として、『早稲田文学』（2月）から〈推讃の辞〉を与えられます。未明には、家族への愛と文学への情熱が、種々の不安を支える太い綱でした。そんな折り、次女鈴江が誕生し、小春日和の時節にふさわしい東の間の一家団欒が家族を訪れます。写真は、そんな日の1枚であったように思われます。しかし、子供たちは絵本に夢中ですが、未明の顔にはどこか愁いの影が射しているようにも見うけられます。

実際、未明を支えた家族の絆は、後にむざんに断ち切られます。大正3年（1914）12月、哲文が疫癘^{えきり}で急逝し、大正7年11月には晴代が結核で亡くなるからです。未明文学には、2人の子供の死が大きな影響を与えています。自筆年譜に、未明は次のように記しています。「貧困時代の二児を失うて、悲しみ骨に徹し、はなはだしく鞭打たる。」—「鞭打たる」の言葉には、亡くなった子供の命の分まで文学に生きようとする強い思いが表れています。童話の執筆が本格化するのも大正7年からです。

未明は、家族の写真を何枚か残しています。亡くなった2児のほか、4人の子供の誕生に恵まれ（鈴江、哲郎、英二、優）、未明はその子らの成長を楽しみにし、新たな絆を育てていきました。それらの写真は、文学館は、大切にお預かりしています。